

戦後80年

平和への 思いを 未来へつなぐ

終戦から80年が経過しました。当時、長泉村から多くの方が出征し、約350人の方が犠牲になりました。戦争を経験された方は、年々少なくなっています。戦争の記憶を風化させないため、二度と同じ悲しみを繰り返さないため、私たちは平和への思いをつなぐ使命があります。戦後80年の今、もう一度、戦争や平和について考えてみませんか。

遺族がつなぐ

遺族会会長であり、自身の祖父を戦争で亡くされた井口さんに話を聴きました。



長泉町遺族会 会長 井口 政美さん

34歳で戦死した祖父

祖父は34歳で戦死しました。それは私の父が10歳の時でした。第二次世界大戦中のインパール作戦という過酷な戦いに参加し亡くなりました。戦死と聞けば、鉄砲に撃たれたと想像するかもしれませんが、実は餓死で亡くなったと聞きました。本当に何のための戦争だったのかと思います。

父は10歳で一家の大黒柱に

祖父が亡くなったとき10歳だった父は、4人兄弟の長男でした。一番下は4歳だったそうです。10歳で一家の大黒柱になった父。今考えるととても苦労したと思います。父からは当時の楽しかった話は聞いたことはなく、苦労した話ばかり聞きました。豊かではなかったけれど、兄弟・親戚と協力して生きてきたそうです。

「戦争に行きたかった人はいない。行かせたかった人もいない」という父の言葉が心に残っています。

戦争を知る人の減少

戦後80年が経過し、全国的に当時の戦争を直接知る人たちの数が年々減少しています。遺族会の会員

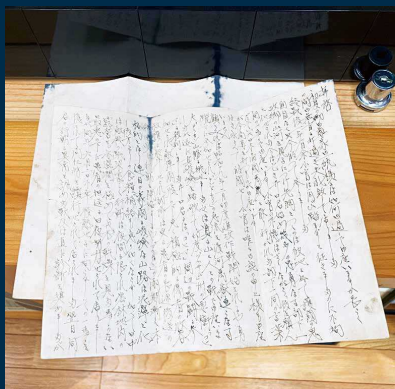


▲慰霊碑



▲長霊神社と遺族会館

も同様です。戦没者の中には海外で亡くなった人も多いため、死に目に会えず、遺骨が帰ってきていない人もいます。遺族会館のある長霊神社には慰霊碑があり、そこには当時の戦没者が祭られています。遺族会として、戦争で亡くなり、家族の元に帰れなかった方々とその家族の思いを大切にしていきたいです。



▲遺族会館で保管されている遺品(手紙)

平和を守るために

私の子どもの頃と比べると、今の子どもたちの方が戦争について学ぶ機会が多いと感じます。世界各地で起きている紛争など、ニュースで見たり聞いたりしていることがその一つだと思います。

ロシアによるウクライナ侵攻を見ると、戦争は突然やってきて、昨日まであった日常を一瞬にして破壊します。今、日本は平和です。この平和な日常をどう守っていくか、この日常が当たり前でないことを今の子どもたちに伝えていきたいです。そして、過去の歴史を知り、なぜ戦争が起きてしまったのか、その経緯と原因を知ることが大切だと思います。平和を守るために、自分に何ができるのか考えられる子どもに育ってほしい。そのきっかけを与えてあげられたいと思っています。

戦没者を追悼し平和を祈念する式典

8月15日(金)、戦争で亡くなられた方々を追悼し、平和を祈念するため、式典をコミュニティながいずみで行いました。

式典では、被爆地である広島市への派遣事業で戦争の悲惨さや平和の尊さを学んだ中学生による感想発表が行われました。

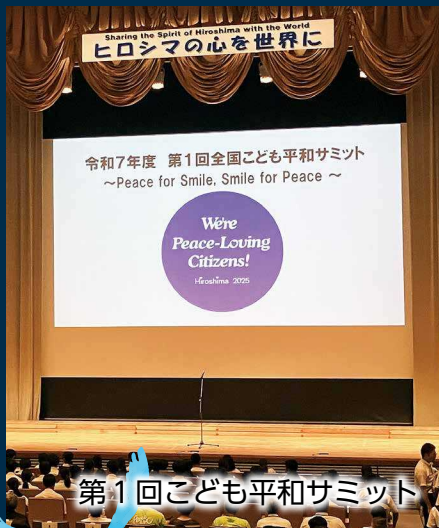
また、会場内では戦争の悲惨さを広く知っていただくためのパネル展示を行いました。



▲パネル展



▲式典に出席する井口さん



第1回こども平和サミット



動員学徒慰霊塔



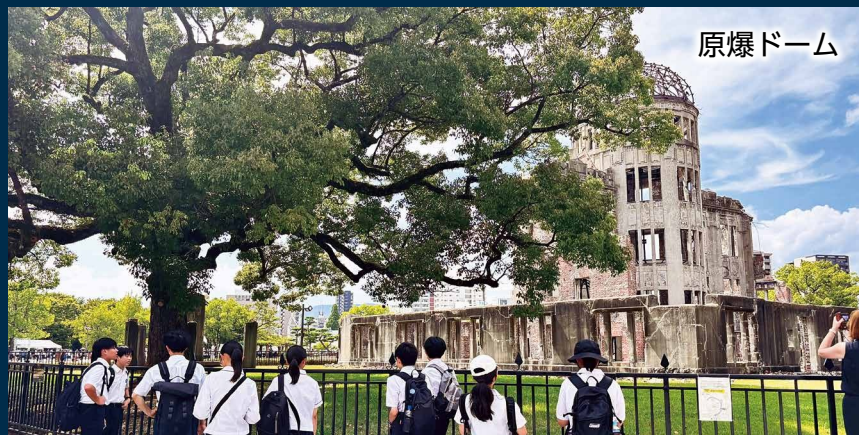
平和記念資料館



第1回全国平和学習の集い
(被爆体験講話)



千羽鶴の献納 (原爆の子の像)



原爆ドーム

中学生がつなぐ

町では、平成18年9月6日(水)に「非核平和都市」を宣言し、このような悲惨な経験を二度と繰り返すことのないよう、風化させることなく、平和の尊さを次の世代に引き継ぐため、毎年中学生の代表生徒を広島市に派遣し、平和研修を行っています。戦後80年という節目の年である今年は、8月6日(水)の平和記念式典に合わせて研修を行い、8月5日(火)から7日(木)に長泉中4人、北中4人の生徒を広島市に派遣しました。式典に参加するほか、「全国平和学習の集い」や「こども平和サミット」、「とうろう流し」などこの期間にしか体験できないイベントに参加し、戦争の恐ろしさや平和の大切さなどについて学びました。



平和記念式典



平和記念公園



平和記念式典



とうろう流し (元安川)

未来へ

長泉中 志田 蒼太



「どうしてこんな目に……」、「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから」これは、原爆によって亡くなった人、傷ついた人、残された人、一人ひとりの心の叫びです。

広島への原爆投下は、罪もない何十万という人々の命を一瞬で奪った、これは歴史上の深く悲しい出来事です。これは人間という生き物が存在している限り決して消えないし、消すこともできません。しかし、人間は時間が経つうちに、こうした出来事の痛みや記憶、感情を忘れてしまいがちです。はたして、そんなことがあってもいいのでしょうか？僕はあってはならないと思います。

では、二度と同じ過ちを繰り返さないために僕たちはこの出来事から何を学ぶべきなのでしょう。それは、広島への原爆投下について「知る」ということだと思っています。失われた数々の命、変わり果ててしまった生

今この瞬間を生きられる幸せ

北中 山田 湖子

「服は全部なくなって、生きているのに体中は真っ黒で、目玉は飛び出していた。『水をくれ。キチとは逃げる途中ではぐれた。』という声でようやく父だと分かった。水をやると死んでしまうと聞いていたのので、『水道が止まって水はでない。』と嘘をつきました。」被爆者の笠岡貞江さん九十二歳は絵を見せながら教えてくれました。私はとても衝撃を受けました。なぜならば私はそれが最初人形だと思ったからです。今でもその絵を一瞬で思い浮かべることが出来るほど怖かったです。

私の歴史の教科書には「アメリカは、原子爆弾を八月六日に広島、九日に長崎に投下しました。」という一文しか載っていません。私も広島に行く前までは、その程度しか知り

ませんでした。しかし実際に広島に行き、たくさんの方を知ることができました。広島の小中学生は毎年、八月六日に学校に行き黙とうをすること。原爆により動員学徒で亡くなった人は広島に次に静岡の人が多かったこと。原爆のことを「ピカ」という閃光と「ドン」という爆発音を組み合わせ「ピカドン」と呼んでいること。しかし実際には被爆者の多くはこの音の記憶がないということ。当時元氣だった子供たちでさえ、十数年後に白血病で亡くなったこと。やけどの後に激しい痛みを伴うケロイドを負ったり、被爆者だからという理由で、差別を受けたりしている方々がいること。原爆は体だけでなく、消えることのない心の痛みを一瞬にして一生背負わせたのだと痛感しました。(抜粋)



※他の生徒の感想文はホームページをご覧ください。



▲全文はこちら

行政課 989-5500